

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592545

研究課題名(和文) 地域アセスメントに関するキャリア・ラダーの構築 効果的な基礎・継続教育の方略

研究課題名(英文) Building of career ladder on community assessment; Strategies of basic and continuing education

研究代表者

大倉 美佳 (Mika, Okura)

京都大学・医学(系)研究科(研究院)・講師

研究者番号：30361984

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：地域看護学の初学科目において、事前学習のプレゼンテーション、日頃の生活を振り返る省察を毎回課した。講義前の関心度・理解度にかかわらず、両学習形態ともに3～4倍の意義を感じていた。また、性別にかかわらず、共感的関心が高いほど、個人的苦痛が低いほど求められる技術項目の自己評価得点は2倍高かった。さらに、2自治体32名の保健師に対する面接調査の結果、特に1年目は、学生時代の学習と現状のギャップを感じていた。その後の新任期には、『わが町意識の芽生え』が重要であると認識していた。中堅期には、『俯瞰的な・客観的な視点で地域をみること』、『人に伝わる地域特性を表現すること』の困難さと重要性を痛感していた。

研究成果の概要(英文)：In first learning, they got to promote the proactive interest and understanding as the reflection and the presentation to prepare each time. Regardless of understanding and interest level before the lecture, they felt the significance of 3-4 times than before the lecture. The total of self-evaluation score of skill items was higher 2 times, as more high empathical interest, and as more low personal distress, regardless of gender. As the results of the analysis to 32 public health nurses' interviews, they were thought to important the following as the period of the work experience 1-5 years; "attachment to Our Town". And, they were felt the ambivalence to important and difficult the following as the period of the work experience more than 10 years; "assess the view point of objective and a bird's-eye view", "expression of the community characteristics in such able to understand other people".

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：保健師 地域アセスメント 基礎教育 継続教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 保健師の基礎教育の課題

看護系大学の急増による実習施設と実習指導者の確保が困難になり、実習に適した事業・活動も減少している。また、実践能力と教育能力を兼ね備え、質を担保した教員の確保が難しい。このように山積した教育課題の中で、保健師の専門的実践能力の基盤となる地域アセスメント能力をどのように教育していくかは早急かつ最大の課題であると考えられる。

(2) 保健師の継続教育の課題

市町村合併により、地域アセスメントするコミュニティの規模が拡大し、これまで蓄積してきた量的データによる年次推移による分析が難しくなっている。保健師として実践活動を通して「肌で感じてきた地域性」が感じにくく、住民との距離感が生まれ、戸惑いを覚えている保健師も少なくない。また、これまで保健師として専門職が一丸となって保健センターに配属されていた形態から福祉、介護、包括支援センター、教育など単独あるいは少数配置へと変化する中で、保健師間の連絡・連携不足と地域アセスメントに基づく事業化の立案・運営や将来展望が実質的に難しいという声を耳にする。

(3) 関連研究における位置づけ

欧米を中心として1970年代以降、地域アセスメントに関する研究は激増傾向を示している。日本においても1990年代以降、保健師の専門性の明確化や実践の質の向上のため、地域の評価方法の展開や教育が見直され、保健師や学生に対する教育方法へと展開されてきた。しかしながら、社会環境の変化や保健医療福祉制度の改革に伴い、市町村合併や保健所再編により行政保健師が捉えるべき「地域」の規模も住民のニーズも変化している。このような状況下で改めて地域アセスメントの教育方法を再考する必要があると考える。

2. 研究の目的

(1) 基礎教育 ; 地域看護学の初学時における効果的な学習形態の検討

地域看護を初めて学ぶ科目における効果的な学習形態を検討することを目的とした。

(2) 基礎教育 ; 地域看護に対する関心・理解の実態把握

地域アセスメントに関するキャリア・ラダーを構築するために、まず基礎教育における学生の地域看護に対する関心・理解の実態を把握することを目的とした。

(3) 継続教育 ; 保健師に対する地域アセスメントの認識に関する面接調査

実践者として活動している保健師自身は地域アセスメントをどのように認識しているの

か、活動実践の中でどのように位置づけているのかという認識の実態を把握することを目的とした。

これら上述の(1)~(3)の目的を明らかにすることによって、地域アセスメントに関するキャリア・ラダーを構築すること、また、保健師の基礎および継続教育の教育プログラムを立案することにつながる。さらに、均霑化された提示がなされれば、キャリア開発の一助となると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 基礎教育 ; 地域看護学の初学時における効果的な学習形態の検討

地域看護を初めて学ぶ科目(概論)における効果的な学習形態の検討を行った。

概論は、2回生を対象にした、一単元(90分)×15回の講義科目であり、地域看護活動の対象(母子保健、高齢者保健、障害者保健、感染症対策など)、活動方法(健康相談、家庭訪問、自助グループづくり、システムづくり、施策化など)、活動基盤となる理論(ヘルスプロモーション、プライマリケアなど)など地域看護学の入門としての多様な内容を含む。

学習形態として、講義を一方向的に聴講するだけでなく、各学生に予習と復習を課した。そのねらいは、上述のように多様で多岐にわたる学習内容であるため、まず学生が自分自身や身近な人々が日常生活を送っているコミュニティに関心を持ってもらうことが重要であると考えたからである。

予習としては、各学生が各単元のテーマや内容に関する事前学習を行い、疑問に思った点や具体例など自分で調べたことを中心に、自分自身が考えたことや感じたことをまとめて整理することとした。講義当日は、数名のグループを単位として、各学生当たり1分間で予習した内容について、プレゼンテーションを行った(以下、プレゼンとする)。

復習としては、講義で重要と思った点や日頃から課題に感じていること、今後自分自身ができそうな点などについて、学びを振り返る省察用紙に記述することとした(以下、省察とする)。

概論の講義の開始時点および全単元が終了した時点で、地域看護に対する関心度および理解度について、自己評価を求めた。また、プレゼンおよび省察の各学習形態に対する意義と負担感についても、評価を求めた。それぞれの評価は、「よくできた」から「全くできなかった」までの10件法を用いた。

なお、教育的介入として関わっている対象およびデータであるため、成績が確定した後、研究者とは別の人物が学生の個人名を除いたデータとしてID化を行った後、分析を行った。

(2) 基礎教育 ; 地域看護に対する関心・理

解の実態把握

卒業試験終了時に調査票を配付した。調査票の項目として、厚生労働省が提示している「保健師教育の技術項目と卒業時の到達度」を基に、98 項目について、「よく分からなかった」を 0 とし、「知識としてわかる」を 1、「学内演習で実施できる」を 2、「指導のもとで実施できる」を 3、「ひとりで実施できる」を 4 とし、5 件法で、自己評価を求めた。各項目の平均値を求められている到達度で除し、百分率を算出し、自己評価の現状と理想とのかい離を検討した。また、卒業試験の成績の中央値を境に高値群と低値群に区分し、各項目の平均値の差の検定を行った。さらに、各学生の個人特性の影響も大きいと考えられたため、完全主義、共感性、達成動機について、各尺度を用いて、回答を求めた。なお、各尺度は先行研究により、信頼性が確保されている。

(3) 継続教育；保健師に対する地域アセスメントの認識に関する面接調査

2 自治体に従事する保健師 32 名を対象として、地域アセスメントの認識および実践に関する面接調査を行った。

保健師としてのこれまでの経験について、順を追って話してもらった。特に地域アセスメント能力に必要な要素は何か、どのように培われていくと考えるか、影響要因および阻害要因と思うものは何かなどを問うた。地域アセスメントに関連して、実際に何をしたのか、何を考えたのか、どう感じたのかという点が知りたい事柄であり、こうすべきだったかということを知りたいわけではないことを事前に説明した。調査の趣旨および倫理的配慮について口頭および書面で説明し、同意書に署名してもらった後、面接を行った。

なお、本研究は、京都大学医の倫理委員会で承認を得た後、研究を行った。上述(1)および(2)の基礎教育に関しては、2010 年 3 月 16 日に、研究課題名「地域看護に対する関心と理解を促す効果的な基礎教育の方略」、第 E1112 番で承認を得た。また、上述(3)の継続教育に関しては、2010 年 5 月 13 日に、研究課題名「地域アセスメント能力を培う継続教育の方略」、第 943 番で承認を得た。

4. 研究成果

(1) 基礎教育；地域看護学の初学時における効果的な学習形態の検討

2010~2012 年度の履修学生 220 名のうち、自己評価用紙を回収できたのは 183 名(83.2%)であった。そのうち、全項目に記載のあった 176 名(80.0%)を分析データとして用いた。

地域看護に対する関心度および理解度の自己評価得点について、中央値を境に高値群と

低値群に区分した。各学習形態(プレゼンおよび省察)の意義および負担感について、ロジスティック回帰分析を行った。また、講義前の関心度および理解度が高いほど、講義後も高いと想定されたため、講義前の関心度および理解度の得点を調整因子とした。次に示す倍率はオッズ比を、()内の数値は 95%信頼区間を示す。

分析の結果、講義後の関心度の高値群は低値群に比べて、プレゼンの意義を 3.2(1.5~6.7)倍、省察の意義を 4.1(1.9~8.5)倍感じていた。講義後の理解度の高値群は低値群に比べて、プレゼンの意義を 3.5(1.5~8.4)倍、省察の意義を 3.7(1.5~8.7)倍感じていた。一方、負担感は、いずれの学習形態についても有意差が認められなかった。

つまり、プレゼンや省察といった学習形態は、地域看護学に関する主体的な理解度を促す学習形態として効果的であるといえよう。但し、単位認定できなかった学生や地域看護に対して関心・理解が低い学生のデータが回収できなかった可能性もあることを考慮して結果を解釈する必要がある。



写真 1: 1 分間プレゼンテーションの様子

理解の程度	講義前	講義後
理解の程度	4 点	9 点
関心の程度	5 点	9 点

効果産出	負担感
1 分間プレゼン	+2 点 / -2 点
4 マス省察	+8 点 / -4 点
定期試験	+7 点 / -2 点
トータル評価	+9 点 / -2 点

図 1. 省察用紙の例

一言コメントを書いて返却すると、次回からの反応がよくなる

(2) 基礎教育；地域看護に対する関心・理

解の実態把握

2011～2013年度に卒業した学生188名のうち、調査票を回収できたのは88名(46.8%)であった。

分析の結果、平均値が求められている到達度の6割に満たない項目は、技術項目98項目中23項目(23.5%)あった。特に、個人・家族レベルにおけるアセスメント、具体的な支援方法、チームの組織化、評価結果の活動へのフィードバック、集団・地域レベルにおける継続的な情報収集、根拠となる法律や条例などの項目が低かった。

また、理解することさえ難しく、よく分からなかったと評価した学生が多かった項目は、施策化の根拠、施策化のための関係部署・機関との協議・交渉、予算のしくみと予算案の作成、成果の公表・説明、保健師活動の研究・開発であった。

これらの項目については、今後、より学生の理解が進むような具体的な教育内容を検討する必要がある。

さらに、卒業試験の成績の中央値を境に高値群と低値群に区分し、各項目の平均値の差の検定を行った。その結果、個人・家族レベルの自然・生活環境のアセスメント、訪問・相談支援、集団・地域レベルの経時的な情報収集、アプローチの組み合わせた活用などの6項目で有意差が認められた。但し、いずれの項目も成績の高値群よりも低値群の方が高い評価だった。

つまり、地域看護に対する理解が深まるほど、学生自身が目指す目標レベルが高くなり、自己評価は下がる可能性がある。今後は、学生による自己評価だけでなく、教員による肯定的な評価をフィードバックしていくことが重要であると考えられる。

さらに、学生の個人特性の影響を検討した結果、性別にかかわらず、共感的関心が高いほど2.7(1.1～6.7)倍、個人的苦痛が低いほど2.8(1.1～7.0)倍、技術項目98項目合計得点は高かった。これらの結果より、臨場感のある事例や活動エピソードを伝えるなど、対象者に対する共感的関心を高めるような教育的かわりをさらに重視することを検討したい。

(3) 継続教育；保健師に対する地域アセスメントの認識に関する面接調査

2自治体32名の保健師の基本属性は次の通りだった。年齢は35.6±7.4歳、保健師の経験年数は11.0±7.5年、休業期間は0.7±1.1年、保健師以外の就業年数は1.3±2.3年、係長以上の役職がある者は5名(15.6%)であった。保健師の基礎教育を受けたのは、専門学校・養成学校17名(53.1%)、短期大学3名(9.4%)、大学12名(37.5%)、最高学歴は専門学校・養成学校14名(43.8%)、短期大学6

名(18.8%)、大学12名(37.5%)であった。男性は1名だった。なお、面接者は研究者1名であり、同一人物が各対象者に対して1回の面接を行った。面接時間の平均は76.6±27.9分であった。

分析の結果、新任期中堅期での地域アセスメントの捉え方が異なった。

特に経験年数1年目は、学生制時代に学んできた、健康指標や保健データの統計的分析や系統的な地域アセスメントを十分に行っていない現状に疑問を持っていた。その後の新任期(経験年数2～5年目を目安)には、まず地域で暮らす人々の生活実態を知らなければ、日常活動を円滑に動かすことができないと感じていた。具体的には、『わが町(担当地区)に関心を持つ』ことが大切で、そのためにまず自らが『足を向けて地域に向く』機会を増やし、『地域のキーパーソンと顔なじみになる・知っている人が増える』ことで、地区担当保健師という存在として知ってもらうことが重要であると感じていた。そして、『日常活動で気になることとわが町(担当地区)がリンクする』ようになり、『わが町(担当地区)に愛着がわく』というプロセスから【わが町意識の芽生え】が重要であると認識していた。

中堅期(経験年数10年以上を目安)には、部署の異動や後輩・学生指導の役割を通して『俯瞰的な・客観的な視点で地域をみる』ことができるようになり、総合的・長期的な計画立案や施策化・事業評価を担うことで『人に伝わる地域特性を表現する』ことの困難さと重要さを痛感していた。

中堅期以降の熟達期や管理期については、面接対象の保健師のうち、係長以上の役職ありの者が少なかったため、本調査では明らかにできなかった。そのため、今後、対象数を増やし、検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計4件)

Mika Okura, Miyoko Uza, Hisako Izumi, Masami Ohno, Hidenori Arai, Kazuko Saeki: Factors that affect the process of professional identity formation in public health nurses, Open Journal of Nursing, 査読有, Vol. 3, 2013, 8-15, doi: 10.4236/ojn.2013.31002

Mika Okura, Chizuko Noro, Hidenori Arai: Development of a career-orientation scale for public health nurses, Open Journal of Nursing, 査読有, Vol. 3, 2013, 16-24, doi: 10.4236/ojn.2013.31003

大倉美佳、野呂千鶴子、荻田美穂子、荒井秀典: 行政分野で働く保健師のキャリア志向尺度の開発および基本属性との関連、日本公衆衛生雑誌、査読有、第58巻、第12

号、2011、1026 1039

竹川那奈世、大倉美佳、桂敏樹、臼井香苗：
ワークライフバランスに関する K 大学看護
学生の意識調査、京都大学大学院医学研究
科人間健康科学系専攻紀要：健康科学、査
読有、第 7 巻、2011、1-8

[学会発表](計 5 件)

大倉美佳、臼井香苗、滝澤寛子、桂敏樹：
「地域看護学概論」の学習形態と学生によ
る自己評価の要因分析、日本公衆衛生学会、
2012 年 10 月 24～26 日、山口市

Mika OKURA: The relationships of the
career orientation, the overall job
satisfaction level and job commitment
for public health nurses working in the
administrative agencies in Japan, The
2nd Japan-Korea Joint Conference on
Community Health Nursing, 17-18 July
2011, Kobe

Mika OKURA: The relationships between
their job satisfaction levels / job
commitment and self-evaluation for
public health nurses working for
administrative agencies in Japan,
International Conferences in Community
Health Nursing Research, May 4-6, 2011,
Edmonton

大倉美佳：行政分野で働く保健師に求めら
れる能力の自己評価と基本属性および職務
経験との関連、日本地域看護学会第 13 回学
術集会、2010 年 7 月 10 日～11 日、札幌市

茅野裕美、大倉美佳、櫻井しのぶ、西出り
つ子：講義を通して学生が大切だと捉えた
地域アセスメントの視点-リアクション・ペ
ーパーの分析から-、日本地域看護学会第
13 回学術集会、2010 年 7 月 10 日～11 日、
札幌市

6 . 研究組織

(1)研究代表者

大倉 美佳 (OKURA, Mika)

京都大学大学院医学研究科・講師

研究者番号：4 6 8 6 1 7 7 1